

台湾における日本語学習者の日本語のアクセント：その実態と教育上の問題点

著者	伊藤 祥子
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 6: 26-38 (1992)
発行年月日	1992-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022391

台湾における日本語学習者の日本語のアクセント

—その実態と教育上の問題点—

伊藤 様子

1 はじめに

近年、日本語学習者の増加が激しく、近隣の中国（大陸）や台湾、韓国などの東アジア地域の中でもそれは例外ではない。また、日本語学習者の急増とともに、日本語学習の目的も多様化してきている。

しかし、いままでの日本語教育の理論や教授法の開発は、どちらかというと欧米諸国、特に英語圏での日本語学習者を念頭に置いたものが比較的多く、東アジア地域の学習者を対象としたものは比較的少なかった。また、このような学習者に対応するためには、学習者の母語に応じた母語別教授法や教材の開発が必要である。そのためには、日本語と他言語との対照研究が必要になってくるが、その点、日本語と英語などとの対照研究は近年盛んになり、また、中国語・韓国語・マレー語などのアジア地域の言語との対照研究も盛んになりつつある。

このような現状から、アジア地域の日本語学習者に対する教育方法の改善をはかることは緊急を要すると考え、そのためにまずアジア地域の日本語学習者の日本語の実態を明らかにし、どのように母語の影響を受けているか、またどのような点に学習の障害があるかなどを解明することが必要であると考えた。そこで、その手始めとして、台湾の日本語学習者（大学生）を対象に調査を実施した。また、韓国でも同様な調査を実施し、分析中である。

小論では台湾の調査から、アクセントに的をしぼり、調査結果を考察し、先行研究との比較も行なう。

なお、小論では人名に関する敬称はすべて省略した。

2 調査の概要

調査は1989年9月、輔仁大学外国語文学院日本語文学系¹⁾の2・3年生を対象に実施した。インフォーマントの中から、他国からの留学生や、ごく少数の客家語を母語とする者および北京語を母語とする者を除いた。その結果、台湾語を母語とする者、2年生50人・3年生30人を得た。なお、台湾では、小学校に入学した時点で共通語である北京語を学習し始めるという。

大学生を対象とした理由は、日本語学科を持つ輔仁大学で調査が可能であったことと、年齢や日本語の学習時間などの点において、ある程度均質なインフォーマントを一定数得ることができると考えたからである。

台湾は9月に新学期が始まるので、インフォーマントは調査時点では新しく2年生、3年生になったばかりであった。よって、輔仁大学での日本語学習時間は2年生約450時間、

3年生約 850時間である。なお、大学入学以前の日本語学習歴については、2ヵ月未満が2年生1名・3年生2名と、1年間で2年生に3名いたが、その他は全員学習歴は皆無であった。また、性別については、同校の日本語文学系はもともと男子学生が少なく、2年生は50人中男性は6名、3年生では30人中5名であった。このように男性が極端に少ないため、「性別」の要因は特に抽出しなかった。

3 調査内容

アクセントに関する調査は、「聴き取る調査」と「読ませる調査」を行なった。調査項目は、「日・火・歯・葉・雨・飴・橋・箸・花・鼻・頭・卵・涙・桜」の1音節語から3音節語までの名詞14語である。

単語の選定については次の点を考慮した。1音節語・2音節語は同音異義語の組み合わせを中心に選定した。また、1音節語～3音節語のどの音節においても、共通語アクセントに存在するアクセントの型をすべて網羅できるようにした。さらに全体的に、2年生においても学習済みであると考えられるような単語や文を設定するように心掛けた。

「聴き取る調査」は、あらかじめこれらの単語を含む短文を示し、共通語として存在するアクセントの型で発音したものの中から、「よい」と思うものを一つだけ選んでもらった。「共通語として存在するアクセントの型」とは、例えば、2音節語には、頭高型●○▽、中高型○●▽、平板型○●▼の三つのアクセントの型が存在するので、この三つの型で発音したテープを流し、その中から当該の単語のアクセントを選んでもらったのである。また、「聴き取る調査」では特に「わからない」という選択肢も設けた。

一方、「読ませる調査」は、これらの単語と、単語を含む短文を1回ずつ読んでもらいテープに録音した。なお、以上の調査はすべて輔仁大学外国語文学院のLL教室で行なった。

4 調査結果

4.1 「聴き取る調査」

調査結果を百分率にし図1～図14に表わした。図の中で、「0、1、2、3」などの数字はアクセントの型を示し、*がついているものが共通語アクセントの型である。図の近くにアクセントの型を●・○で示しておく。その際、▼・▽は助詞などの付属語を表わす。なお、●・▼は当該音節が高く発音されることを表わし、○・▽は当該音節が低く発音されることを表わす。また、「?」は「わからない」という選択肢を選んだ人の比率である。

4.1.1 1音節語 図1～図4を参照されたい。図1「日」では2・3年生ともに約8割の者が共通語アクセントの「0」を選び、かなり正確にアクセントの型が把握できている。また、図2「火」でも、3年生では「日」と同様に約8割の者が正確に型を把握し、2年生でも6割の者が把握しているようである。

しかし、図3「歯」と図4「葉」では、前述の「日」や「火」とは様相が異なる。学年差はなく、2・3年生ともに●▽・○▼の二つのアクセントの型を、どちらも5割前後の者が選択しており、アクセントの型はあまり正確に把握されていない。

次に、特に図には示さないが、これらの1音節語において、「日と火」、「歯と葉」という同音異義語でクロス集計を行ない、アクセントの識別を見てみると、「日と火」の同音異義語の識別はかなり正確にできているが、「歯と葉」においては、同音異義語を識別しようという意識は見られるものの、正確なアクセント型の把握まではしていない。

4.1.2 2音節語 図5～図10を参照されたい。この中で図5「雨」は、2年生では約8割、3年生では約9割の者が共通語アクセントである頭高型●○▽を選択しており、正確にアクセントの型の把握がなされている。この語は他の語と比較してもアクセントの型の把握がよくなされている語の一つである。

図6「飴」においては、2・3年生ともに6割近くの者が共通語アクセントである平板型○●▼を選択しており、頭高型●○▽を選択している人は非常に少ない。その点では、頭高型の「雨」と区別しようという意識が見られる。また、単語単独のアクセントに注目すれば「飴」は○●であるので、単語の部分のアクセントが○●となる平板型と尾高型を合わせれば、2・3年生ともに8割以上になる。したがって、単語単独のアクセントは把握できているが、助詞等の付属語が接続した場合までは把握できておらず、聴き取りが困難であると言える。

図7「橋」では、共通語アクセントである尾高型○●▽を選んだ人は2・3年生ともに4割弱で、平板型○●▼を選んだ人も2・3年生ともに約5割である。しかし、「飴」と同様に単語単独のアクセントに注目すれば、「橋」は○●であるので、単語の部分が○●となる平板型と尾高型を選んだ人を合わせると、2・3年生ともに約9割になる。したがって、「飴」の場合と同様、単語単独のアクセントは把握できているようである。

図8「箸」においても、3年生では約5割の者が共通語アクセントの頭高型●○▽を選んでいるが、2年生では2割～4割の間で、三つの型に分かれている。したがって、3年生ではやや型の把握ができているが、2年生では確実とは言えない。

図9「花」では、3年生は6割近くが共通語アクセントの尾高型○●▽を選択している。「花」も単語単独のアクセントは○●なので、今まで見てきた尾高型の2音節語「橋」や「飴」と同様に、尾高型と平板型を合計すれば2・3年生ともに8割以上を示す。したがって、「花」の場合についても、単語単独のアクセントは把握できているが、付属語が接続した時のアクセントの聴き取りはやはり難しいと言える。

2音節語の最後に図10「鼻」を見ると、共通語アクセントの平板型○●▼を選択した人は2・3年生ともに2割前後と少ない。「鼻」は単語単独では○●なので、尾高型と平板型を合計すると、2・3年生ともに5割に近いものの、頭高型を選んでいる者も2・3年生ともに4割以上いる。したがって、「鼻」については、単語単独の場合もアクセントは把握できておらず、まして、付属語が接続した時のアクセントの型も未習得であると言える。

次に、ここでも2音節語の中で「雨と飴」「橋と箸」「花と鼻」という同音異義語でクロス集計を行ない、アクセントの型の識別を見みると、全体的には1音節語の場合と同様、これらの同音異義語においてアクセントの型を区別しようとする意識はあると思われる。しかし、語によって差があり、「雨と飴」の組み合わせではほぼ識別できているが、「花と鼻」の尾高型と平板型の組み合わせはやはり聴き取りが難しい。

4.1.3 3音節語 調査結果を図11～図14に示す。まず、図11「頭」では、学年差は

ややあるが、平板型○●●▼を選んでいる人が3年生では8割近く、2年生では半数以上いる。また、図14「桜」を見ると、平板型○●●▼を選んでいる人が2・3年生ともに8割前後いる。他の図12「卵」や図13「涙」と比較しても、「桜」は、アクセントの把握がよくなされている。これは「桜」が日本の代表的な花であるということもあり、この語の学習頻度が他の語よりも高く、アクセントの習得度も高かったためであると考えられる。

「桜」は単語単独では○●●で、付属語が接続した場合は平板型○●●▼となる。しかし、「頭」の場合、単語単独では「桜」と同じ○●●であるが、付属語が接続すると尾高型○●●▽となるので、ここにも「花」と「鼻」で見たような、平板型と尾高型の識別の難しさが現われていると思われる。

次に、図12「卵」を見てみよう。「卵」の調査結果では、平板型○●●▼・中高型○●○▽・尾高型○●●▽がそれぞれ2割～4割見られ、型の把握はできていないが、頭高はほとんど選択されていない。

「卵」は『日本語発音アクセント辞典』（NHK編、1986）によれば、共通語アクセントとして、中高型○●○▽の他に平板型○●●▼が許容されている。したがって、「卵」が中高型を示す語として、必ずしも最も適切なことばであるとは思われないが、3音節語の中高型は非常に少ないということもあり、インフォーマントにとってなるべくわかりやすく、かつ基本的なことばを設定するために「卵」を採用したことはやむを得なかったと思う。

3音節語の最後に図13「涙」を見ると、「涙」は共通語アクセントでは頭高型●○○▽であるが、調査結果では、四つのアクセントの型と「？」の「わからない」にほぼ均等に分かれ、2・3年生ともに約2割が「わからない」と回答している。他の3音節語では「？」の「わからない」という選択肢を選んだ人は皆無に近く、1音節語や2音節語でも1%未満、または皆無であった。以上から、「涙」に関しては、他の3音節語と比較して、特にアクセントの習得度が低かったためか、あるいは、単語自体の習得度が低かったため、このような回答結果になったのであらうと思われる。

3音節語をまとめると、音節数が多くなるほどアクセントの型の把握が難しくなると考えられる他に、使用頻度による差があると思われる。「桜」ではアクセントの型の把握ができており、また、「頭」では単語単独のアクセントはほぼ習得できているが、付属語が接続した時のアクセントは難しく、また、「卵」「涙」のアクセントの習得は、単語単独の場合もかなり難しいことが明らかになった。

4.1.4 「聴き取る調査」のまとめ アクセントの聴き取りについて、個々の語の調査結果を見てきた。アクセントの聴き取りを全体的を見ると、語による差が大きい、これは語の習得度や、あるいは教科書に出現する頻度の違いによるところが大きいと思われる。

また、1音節語、2音節語、3音節語と音節が増えるにしたがい、平板型を選択する者がやや増加していく傾向がある。輔仁大学出身の留学生によれば、日本語のアクセントについて「日本語の名詞のアクセントは平板型が多いので、アクセントがわからない単語は平板型で発音するように」という教育を受けたということであった。「共通語のアクセント」（秋永一枝、『日本語発音アクセント辞典』1986、P.71～P.72）によると、名詞のアクセントの型は「1拍語、2拍語では頭高型が多」いが、「3拍語には平板型が多く」、

「4拍語も平板型が多」いということである。

4.2 「読ませる調査」

「読ませる調査」の中から、付属語が接続したときのアクセントについての調査結果を「聴き取る調査」と比較しながら簡単に述べる（図15～図28参照）。図の中の数字や記号は「聴き取る調査」の場合と同様である。

4.2.1 1音節語 図15～図18を参照されたい。これらを見てみると、「聴き取る調査」ではかなり正確だった「日」と「火」のアクセントの把握が、「読ませる調査」では低下し、また、同音異義語をアクセントで区別しようとしていないようである。

4.2.2 2音節語 図19～図24を見ると、図19の「雨」では、2・3年生ともに「聴き取る調査」と同様かなり正確に共通語アクセントの型を実現している。この語は調査語の中でも特に共通語アクセントの習得度が高い語である。また、図20の「飴」なども2・3年生ともにほぼ共通語アクセントを実現していると言える。しかし、図21の「橋」や図23「花」などの尾高型の語は、平板型で発音するものも多く、平板型と尾高型を発音し分けることは難しいことがわかる。また、図23「花」と図24「鼻」のような尾高型と平板型の同音異義語の組み合わせは、「聴き取る調査」と同様にこれらを区別することはやはり難しいようである。

4.2.3 3音節語 図25～図28の中で、まず図28「桜」を見てみると、学年差はややあるが、3年生では「聴き取る調査」と同様に、かなり正確に共通語アクセントの型を実現している。図25「頭」でも、「桜」ほどではないが、「聴き取る調査」と同様に単語単独でのアクセントは実現できている。しかし、図26「卵」や図27「涙」では、「聴き取る調査」と同じく共通語アクセントの型は実現できていない。

4.2.4 「読ませる調査」のまとめ 今回の調査における1音節語・2音節語の同音異義語は、すべての組み合わせが異なるアクセントを持つものであった。インフォーマントはこれらをアクセントで識別しようとするあまりに、「花」と「鼻」のような単語単独では同じアクセントのものを、単語単独の段階で区別しようとする傾向が見られた。同音異義語に限らず、平板型と尾高型の識別を的確に教えることは、アクセント教育の大きな課題であるといえる。

5 先行研究との比較

アクセントについて「聴き取る調査」と「読ませる調査」の調査結果を述べたが、ここで、本調査結果と先行研究との比較を行ないたい。

台湾語を母語とする人たちの日本語アクセントについて述べたものの中で、最近のものとしては野沢素子（1973）、謝逸朗（1980）などがあるが、いずれも、多くの資料を扱ったものではなく、どちらかというと‘case study’的なものが多い。一定数の統計的な資料を扱ったものに張雪玉（1989）がある。そこで、ここでは張（1989）との比較を行ないたい。

まず、インフォーマントについて、張（1989）では本調査と異なり、平均年齢は64歳の高年層を対象としている。日本語の学習年数6年間から13年間とやや幅がある。調査内容は、小論の「読ませる調査」とほぼ同じで調査項目も共通のものが多いが、「聴き取る調

査」は行なっていない。張（1989）の調査結果を、1音節語から3音節語まで簡単にまとめて●○などで表わすと次のようになる。

1音節語●▽	単語単独では●
2音節語●○▽	〃 ●○
3音節語○●○▽	〃 ○●○

このように張（1989）の調査結果では、平板型や尾高型で発音するものはあまり見られず、単語単独の場合を見ると、音節数にかかわらず最終音節から2番目の音節に「下がり目」があると言える。さらに、単語単独の場合も助詞などの付属語が接続した場合でも、アクセントの下がり目は替わらないという特徴がある。つまり、別のことばで言えば固定式アクセントであると言えることができる。ほぼ同様のことは、先にあげた野沢（1973）、謝（1980）などでも述べられている。

ところが、本調査の大学生では、先行研究とは大きく異なり、「雨」「桜」のように正確な型の把握ができていない語もあり、また、アクセントの型の区別が全く見られないということはなく、言われるような固定式ではなかった。

では、なぜこのような相違が生じたのかを考察してみたい。

まず、ここには日本語のアクセント教育の問題が関わっていると思われる。張（1989）のインフォーマントは高年層で、日本統治時代に日本語教育を受けた人たちである。したがって、日本語学習歴はおおよそ6年以上であるが、これらの人々はほとんどアクセント教育を受けてこなかったのではないかと考えられる。

一方、本調査のインフォーマントについては、アクセント学習の有無についても質問をしたところ、2・3年生ともにほぼ全員が「習った」と回答していた。したがって、輔仁大学では、日本語教育の際、アクセント教育をある程度行なっていると言える。輔仁大学出身の留学生によると、アクセントについては主に1年生で学習し、アクセントはアクセント辞典などを利用して覚えるように指導されたということである²⁾。

以上から、輔仁大学の学生に、台湾の高年層の傾向がほとんど見られないのは、アクセント教育の影響であり、アクセントの型の把握がなされている点には、アクセント教育の成果が現われていると考えられる。したがって台湾語のような声調言語をを母語として持つ学習者に対しては、アクセント教育はその成果をかなり期待でき、日本語のアクセントの型を正確に把握することができるようになると考えられる。

6 おわりに

以上、台湾の大学生の日本語アクセントの実態を明らかにし、先行研究との比較を行なうことにより、台湾の日本語学習者に対するアクセント学習の可能性も期待できた。

最後に、果たして日本語学習者にとってアクセント教育が必要であるかどうかという問題を考えたい。これには、ひとつは学習者の母語のアクセント、つまり母語が高低アクセントを持つ言語であるかどうか、そしてもうひとつは日本語学習の目的がどこにあるかによって、その対応が左右されることが考えられる。例えば、その目的が、将来教育機関等で日本語教育を行なうためや、日本語放送などに関わるためとしたら、中国語圏のような高低アクセントを母語とする日本語学習者に日本語のアクセント教育を行なうことは、

決して無益なことではなく、大きな成果を挙げ得ることがこの調査結果からわかる。ただし、一般にアクセントを持たない韓国語などを母語とする学習者に対しては、別の対応の仕方が必要になってくるだろうと思われる。

今後の課題としては、韓国でも同様な調査を行なっているので、韓国の資料分析を急ぎ、台湾と韓国の比較を行ないたい。今回のアクセントの調査項目は、1音節語から3音節語までの名詞14語だけであったので、語を増やしたり、他の品詞も行なう必要がある。また、台湾の日本語学習者に対してアクセント教育を実験的に行ない、結果を分析することにより、具体的にどのような教育方法が効果を上げるかなども考えていきたい。

〔後記〕

資料収集にあたっては、輔仁大学外国語学院日本語文学系主任林水福教授および前系主任山崎陽子教授をはじめとする関係各位にご厚情とご協力を賜わった。調査に際しては、同学院日本語文学系の学生の皆さま、張雪玉（東北大学大学院一博士課程一在学中）、邱明麗・莊幼糸・簡成財（現在、信州大学大学院人文科学研究科学生）、曾淑娟（調査当時、信州大学人文学部研究生）の諸氏に大変お世話になった。記して、お礼申し上げる。

また、小論作成にあたっては終始馬瀬良雄先生にご指導いただいた。心より感謝申し上げます。

なお、この小論は平成元年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文「台湾における日本語学習者の日本語の音韻・アクセントの実態—大学生の場合—」の一部に加筆したものである。

【注】

- 1) 調査当時、台湾で「日本語学科」を持つ大学は、輔仁大学を含め次の4校であった。しかも、すべて私立大学である（順不同）。

輔仁大学・東呉大学・淡紅大学・中国文化大学

なお、今後他の私立大学や国立大学でも日本語学科設立の予定を持つところがあるようである。

- 2) 輔仁大学3年生（調査当時）李于青によれば、日本語のアクセントについての音声学としての授業は特になく、主に会話の授業でアクセントを学習するという。そしてカセット・テープによる教材やアクセント辞典などを利用して自習するということがあった。

図中の記号について

* = 共通語アクセント

? = 「わからない」を選択したもの

誤 = 誤って読んだもの

NR = 無回答

図 1

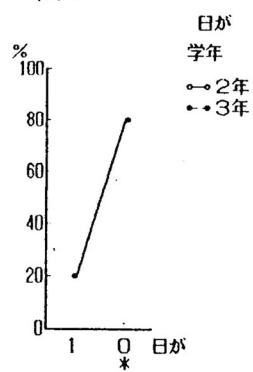


図 2

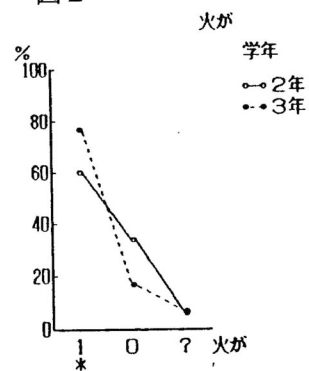


図 3

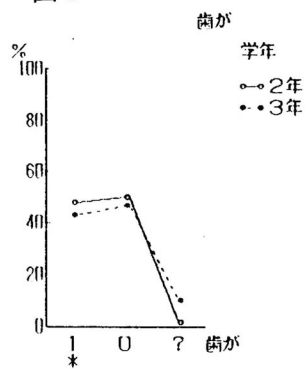
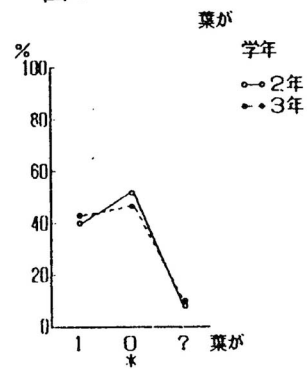


図 4



1 音節語

1 = ●▽

0 = ○▼ (以下同様の表でも同じ)

図5

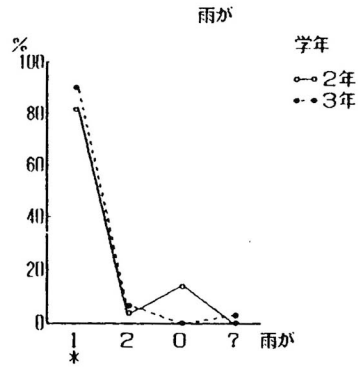


図6

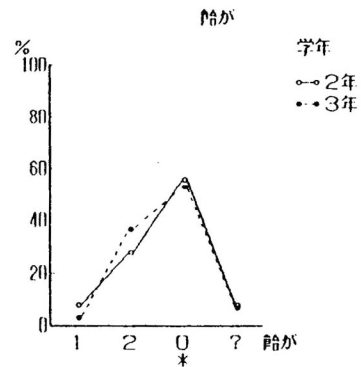


図7

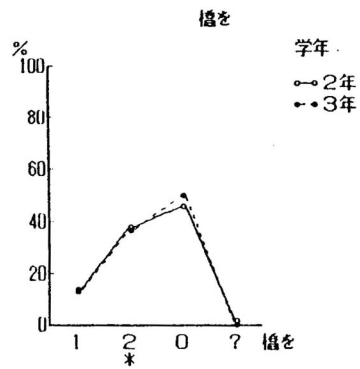


図8

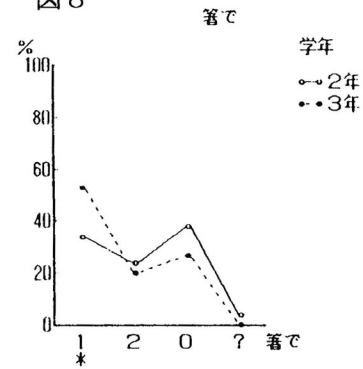


図9

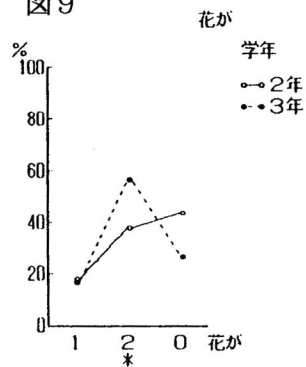
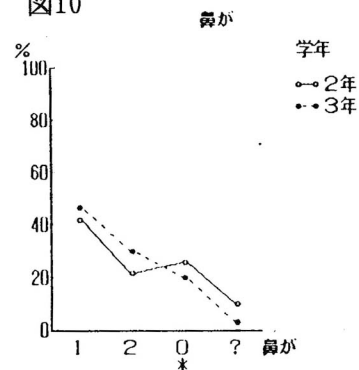


図10



2 音節語

1 = ●○▽

2 = ○●▽

0 = ○●▼ (以下同様の表でも同じ)

図11

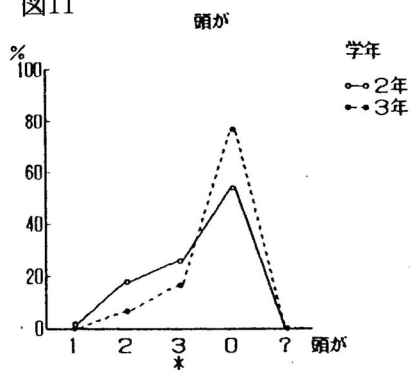


図12

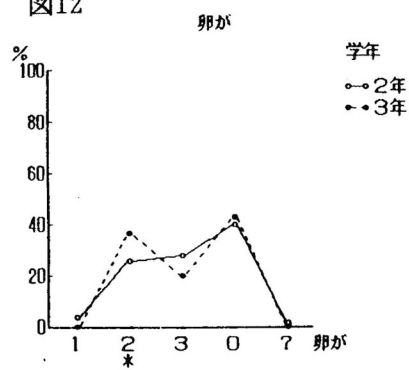


図13

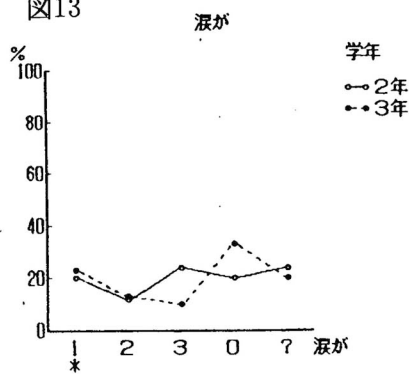
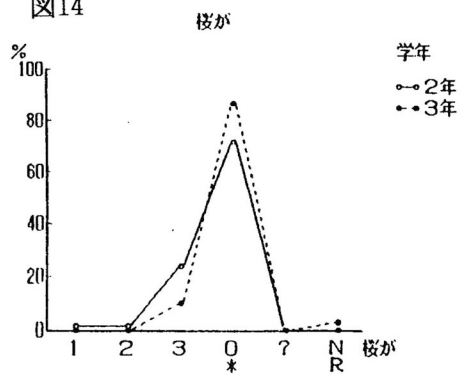


図14



3音節語

1 = ●○○▽

2 = ○●○▽

3 = ○●●▽

0 = ○●●▼ (以下同様の表でも同じ)

図15

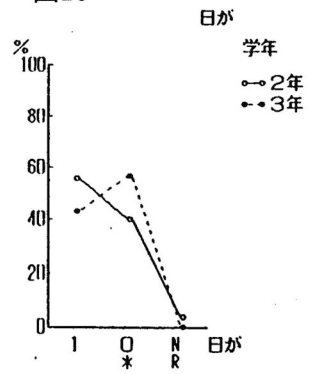


図16

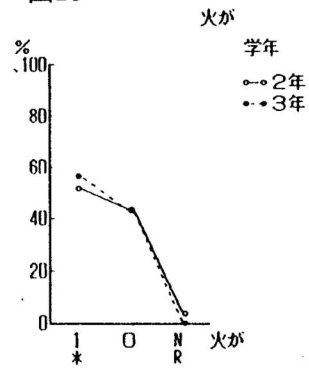


図17

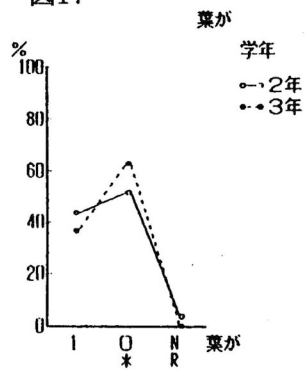


図18

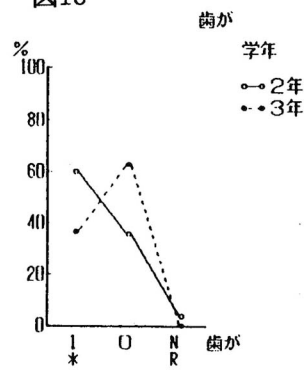


図19

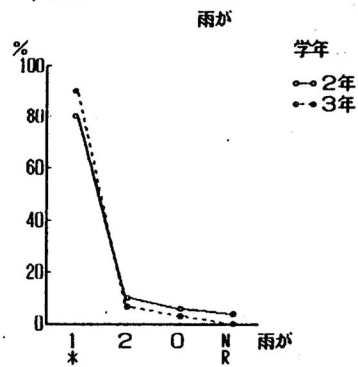


図20

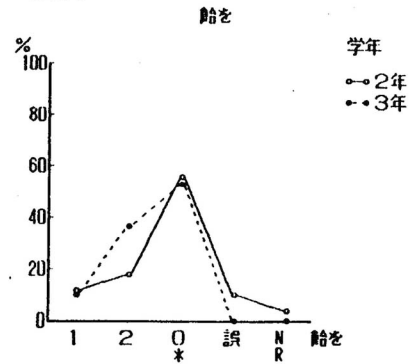


図21

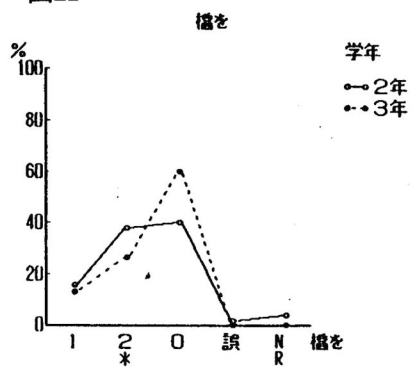


図22

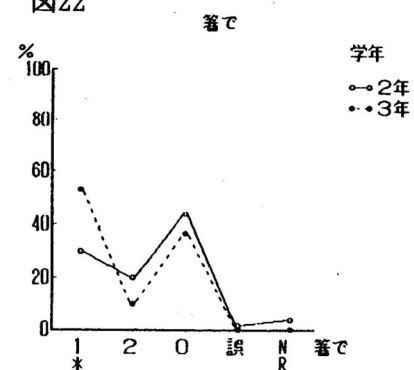


図23

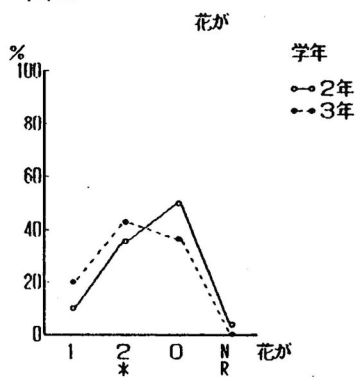


図24

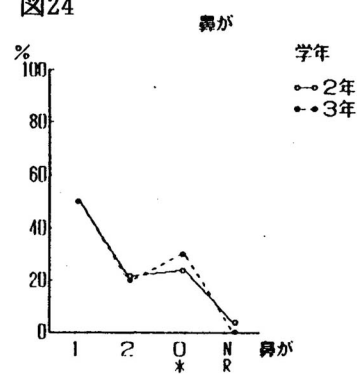


図25

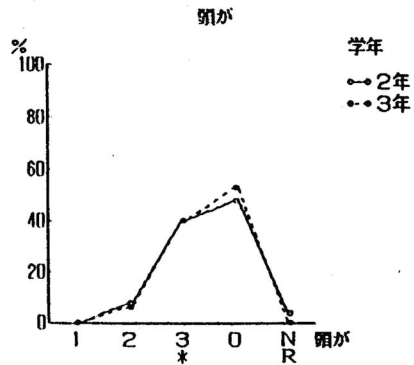


図26

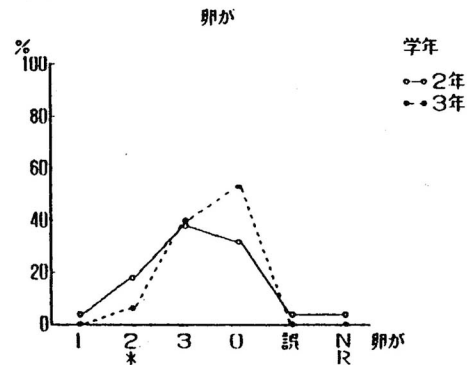


図27

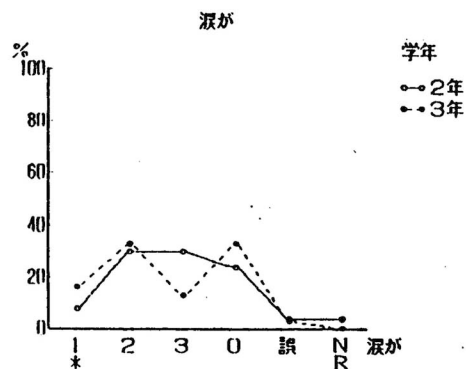
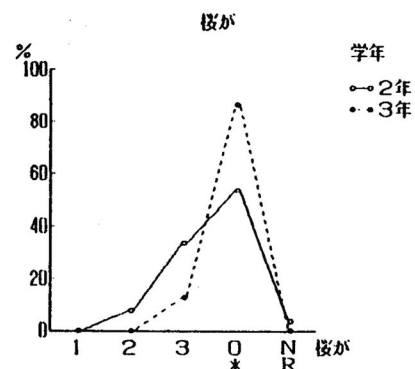


図28



《参考文献》

- 野沢素子 (1973) 「台湾人留学生の日本語に於けるアクセントの傾向について」『日本研究』第3号
- 野沢素子 (1974) 「台湾人留学生の日本語学習に於ける音声の諸問題についての報告」『日本語と日本語教育』第3号
- 謝 逸朗 (1980) 「台湾流日本語アクセントについての考察—日本語教育との関連において—」『外国人と日本語』第5号
- 秋永一枝 (1986) 「共通語のアクセント」『日本語発音アクセント辞典』(改訂新版) 日本放送出版協会
- 張 雪玉 (1989) 「閩南語を母語とする日本語学習者の日本語音声についての一考察」信州大学大学院人文科学研究科修士論文

(鹿児島大学教養部助手)